
裁 ~ SAI ~

ふぢい 柚樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裁（SAI）

【Nコード】

N7321E

【作者名】

ふぢい 柚樹

【あらすじ】

自殺した辻睦月、その友人だった藤堂賢吾の回想話

プロローグ（前書き）

注意

この小説は未完です

続きを書いていただける作家さんを募集しております

プロローグ

私の友人が死んだ。

辻 睦月。それが彼の名だ。彼は私と同じ年でまだ17歳だった。彼の死因は出血多量によるショック死、自殺だ。

彼の死に顔をさつき見た。

まるで私を嘲笑うかのように優しい微笑みを浮かべていた。発見当事と同じ表情をしているそうだ。

死んだのに、なんて笑みなんだ……睦月

お前なんか大っ嫌いだよ、睦月。

葬式（前書き）

この小説は未完です
続きを書いていただけの作家さんを募集しております

葬式

それは葬式にはまったく似合わない真夏日。

カラカラと音もつきそうな陽炎をもぐらつく暑い夏の午後

まるで「光を下さい」と言わんばかりに皆、黒い喪服に身を包んでいた。特に男性は長袖のスーツなので始終、バタバタと手で顔を扇いだり、上着を脱いだりして汗を抑えていた。

誰もが彼、辻 睦月の死を悼み、涙を流していた。

・・・私はこの空間が息苦しかった。

まるで空気の薄くなった・・・いや、空気のないような別空間に放り出されたようだった。

私は苦しかった。暑さに耐えかねて流れ出る汗にも不快を感じ得ない程、私はこの空間を忌み、嫌っていた。

ワイシャツのボタン、ネクタイ、それらを緩めても決して苦しさは治らなかった。

そうして首元を緩めていると、担任の先生が「みつともないから、直しなさい」と注意を促してきた。

私と睦月は同じ高校の同じクラスだった。

葬式にはクラス全員参加だった。睦月と仲が良いわけでもない生徒が涙を流している。

私とはとにかくこの場から逃げ出したかった。

早く自分の居るべき場所に、通常空間に戻りたかった。

なぜか

辻 睦月はそれだけの苦しみを私にあたえるだけの充分な環境をつくりあげたからだだった。

この異常的なまで私を苦しめる、この空間から私は早く逃げたかった。

ああ、頭がぐらつく・・・軽い眩暈がして視界がぐにやりと曲がる。もしかしたら本当の世界はこんなふうに曲がっているのかもしれない。そんな事をぼんやりと思った時だった。

「藤堂くん」

少し高い、女の声だ。私は声の方へと振り向いた。

ぱつぱつと威勢良く切られたショートカットの短い髪に、いつでも好奇心に満ちているような大きな瞳、部活のせいか健康的にやけた肌・・・その身体を包む学校指定のワイシャツ、膝よりも短い紺色のスカート。

見覚えのあるその顔は、同じクラスの榊原 可奈だった。

「・・・何？」

私はそっけなく返事をした。

今は誰とも馴れ合いたくはなかった。

その反応が、睦月が死んだ悲しみから来ていると思っただろう、榊原は微かに同情の表情を見せた。

・・・それはまったく違うのだが。

「あ、あのね。私さ、よく辻さんと帰りが一緒になったのね・・・」
それが何だったというんだ？ そんな事をぼんやり思いながら、静かに耳を傾けていた。

「それでさ、あの日の前日も帰りが一緒になったのね・・・」

あの日の前日・・・？ ああ、自殺した日の前日って事か・・・

「でもね、いつも辻くん『またね』とか『また、明日ね』って言うのに、その日だけ言わなかったの・・・もう、決意してたのかな・・・」

私は何もこたえなかった。

でも、心の中で答えは出ていた。しかし、私はそれを榊原には言わなかった。

ただ、遠くの空を見て「さあな」と答えただけだった。

出会い（前書き）

この小説は未完です

続きを書いていただける作家さんを募集しております

出会い

彼、辻 睦月の話をしよう。

彼と初めて会ったのは中学3年の春休み、といっても卒業しているので春休みとはいえないのかもしれないし、高校の入学も済ませていない。そんな曖昧な時間の中で彼と出会った。

私が前から探している本を友人の坂井 肇が隣町の本屋で一冊だけ見掛けた、と教えてくれたので私はその本屋へと足を運んでいた。本の題名は“こころ”、著者は有名な夏目 漱石だ。どこにでもある本だが、欲しがっている本には大好きな作家が解説を付けているのだ。

私は本屋に着くなり、その本のある棚へと直行した。どこだ、どこだ、と探しているうちに一人の男にぶつかりそうになった。見た目通り、こういう棚に並んでいる文学・文芸本が好きそうな端正な面持ちをしていた。

その男は歳の頃は私と同じくらいで柔らかかそうな色素の薄い栗色の髪、知性の宿った神経質そうな眼。男のくせに白く、すらっと伸びた指……

その男こそ、辻 睦月だった。

私は本を探そうと彼から視線を外そうとしたその時だった、彼が持っている本が眼に入った。

私は冷や汗をかいた、今までずっと探していた本を目の前の男に取られてしまうかもしれない。

……そう思うと我慢がならなかった。私は無意識に声をかけていた。

「その本、買うんですか？」

彼はその声に驚いたように顔を向けた。

しまった、と私は思った。思いがけずに声をかけてしまったものとはにかく、放った言葉に少々の怒気が含まれていたからだ。私は咄

嗟に言葉をつけ加えた。

「あ……つと、ごめん。その本、俺も買おうと思っていたんで……つい……」

僅かな野心。「欲しい」と言ってしまったえば大概の人は譲ってくれるだろうと思っただからだ。

彼はきよとん、としてそれから笑って案の定、私に本を渡してきた。

「どうぞ。ただ、ちよつと手に取ってみただけなんだ」

やわらかい笑みに、凜と通った声だった。

「ご、ごめん……勘違いして。買うのかと思っただんで……1冊しかなかったし」

私は少しの罪悪感と一緒に胸に本を抱えた。

「夏目 漱石って面白いの？」

彼は興味有り気に私に話かけてきた。

私は面倒だな。と思っただが譲ってもらった以上、失礼のないよう返事をした。

「面白いかは個人の感覚の違いだし、俺も読んでないから解らないけど……この本の解説をしている作家が好きなんだ」

「へえ……」

「前から探してたんだ。でも、ずっと無くてやっと見つかって嬉しいよ」

私は心底、そう思った。頭の中は本を読むことでいっぱいだった。

「前っていつから探してたの？」

「えつと……中2ん時ぐらいだから……1年前くらいから、かな？」

そういえば、そんな長い間この本を探していたのだな、と思い出した。

「へえ、すごいね。じゃあ君は中3かい？」

「え？ う、うん？なのかな、今年の4月からは高1だしね」

そう私が答えたら彼は花が咲くようにぱあつと微笑んだ。

「俺と同じだね。俺も4月から高1になるんだ。君、高校は何処に

行くんだい？」

馴れ馴れしい奴・・・犬みたいな奴だな、と内心呆れた。
しかし、私は笑って返した。

「都立のセイコー、西南大学付属高校だよ」

「マジ！？俺と同じところだよ」

彼は満面の笑みを浮かべた。

私はその純真そうな笑顔に退いてしまい、「ああ・・・」としか返せなかった。

俺と一緒に高校のドコが嬉しいのだろうか？

彼は私のそんな反応に気づきもせず、右手を差し出してきた。

「俺は辻 睦月。高校に入ったらよろしく」

私は啞然としてしまった。人見知りをしてしまう私にとっては驚きの何ものでもなかった。

しかし、好意で出された手を無視するわけにもいかず仕方なしに本を左手で持ち、右手を差し出し握手をした。

「俺は藤堂 賢吾。こちらこそよろしく・・・」

彼は「いい名前だね」と微笑んて言った。

この時、私が思ったのはただひとつ・・・

彼、辻 睦月は私とは全然違う、正反対の人間だと。

私とは違い感情の起伏があり、懐っこく、すぐに人の輪に入れそうな奴。

私はこの時、彼の右手の爪がそれは酷く傷ついていたことに気づいてはいなかった。

これが辻 睦月との出会いだった。

それから何日か経って私たちは入学式を迎えることになる。

辻 睦月と改めて会ったのもこの時だった。私は彼と同じクラスになった。

僕がこの世から居なくなってしまう前に少しだけ、話をしよう。

彼、藤堂 賢吾について・・・

僕が藤堂 賢吾と出会ったのは僕の住んでいる街にある本屋だった。僕はなんの気なしに街をぶらついていて、ただ、何となく外に出たかった。

そんな気持ちって時々ないだろうか？

ぶらぶら歩いているうちに、よく行く本屋が見えてきた。

本か・・・ 財布は持っていないだったので立ち読みをしようと思つて中に入った。

僕は漫画より文字がびっしり並んだ小説などが好きだった。だからその時も足は一直線に小説や文学のコーナーに自然と向かっていた。いつものように新刊の置いてあるスペースを見たが、あまり惹かれるものはなかった。仕方ないので陳列されている棚の方へと足を進めた。

何冊か手にとってページを流してみたが、どうも僕にとって面白いものは見つからなかった。

僕は時々、ふと、こう思う。本屋や図書館はある意味残酷なものではないか？・・・と。

どうして？と問われるだろう。この大量にあふれた本を見ると物悲しくなる時がある。

こんなにも本はあふれているのに人、一人が読む本はこのあふれた量の中のたった一握でしかない。著者名も本の題名も多種多様なのに、人、一人が読む本の数はなんてちっぽけなんだろう。

それに「本を出版する」というのは著者にとって、とても大きなこ

とだと思つ。

それを読み手である僕たちは中身も見ないで、表紙も見ないで素通りしてしまう……

書き手、著者が時間を削つて奮闘しながら書いているものなのに……

それなのに僕たちが一生を終えるまでに読む本は本当に一握だ。

それが僕にとつては、著者にとって残酷なような感じがする。

僕の考え過ぎなのだろうか？

僕は1冊、1冊、どんな本でも表紙に眼を通した。偽善的かな？と思ひながら。

そうしていると1冊の本に眼がとまった。

“こころ”と目を惹く紅色のカバーに遠慮がち箔押しされていた。

著者名は有名な夏目 漱石。

僕はなんとなく手を伸ばした。夏目 漱石は興味があつたが読んでみたことがなかつたからだ。

ずしりと重い、大判サイズなので本も大きく、分厚かつた。

僕は左手で本を支え、右手で本を開いてみた。

最初のページにあつたのは夏目 漱石のモノクロ写真と生涯の年表など……あまり眼を通すつもりはなかつたので次のページを開いた。その時だつた。

「その本、買うんですか？」

僕の左から焦つた様な、わずかに怒つたような静かに響く声がした。僕は思わず本から眼を離し、声のある方へと顔を向けた。

そこには歳の頃は僕と同じくらいで、短く整えられた艶のある黒髪、眼鏡のレンズに包まれた目尻が鋭い、知性の宿つた眼。夏の名残か、地なのか健康に薄くやけた肌。

その男こそ、藤堂 賢吾だつた。

彼は思わず言葉を発してしまつたらしく、はつとした表情を見せた。

「あ……つと、ごめん。その本、俺も買おうと思つていたんで……
ついで……」

彼は頬をわずかに紅潮させ、頭を分が悪そうに掻いた。

僕はそんな彼の仕草が何となく定番だったので、微かに笑ってしまった。

「どうぞ。ただ、ちょっと手に取ってみただけなんだ」

僕は本を閉じ、彼に手渡した。財布を持っていないので買えるわけでもないし。

「ご、ごめん・・・勘違いして。買うのかと思ったんで・・・1冊しかなかったし」

彼は大事そうに本を受け取り、抱えた。

僕は彼がそんな大事そうに扱う本の内容が気になった。

「夏目 漱石って面白いの？」

彼はわずかに怪訝そうな表情をしたが、微笑んで返事をしてくれた。

「面白いかは個人の感覚の違いだし、俺も読んでないから解らないけど・・・この本の解説をしている作家が好きなんだ」

「へえ・・・」

本の内容よりも解説が気になるなんて少し、意外だった。

「前から探してたんだ。でも、ずっと無くてやっと見つかって嬉しいよ」

彼は心底嬉しそうに微笑んだ。それだけ嬉しいほど探していたのだろう。

彼ともう少し話をしてみようと思った。僕にはめずらしく、他人に興味を抱いたからだ。

「前っていつから探してたの？」

「えっと・・・中2ん時ぐらいだから・・・1年前くらいから、かな？」

「へえ、すごいね」

彼の思い入れは凄いな、と少し感心した。淡泊そうな静かな面持ちには案外、健気というか一途というかそんな思い入れがあるとは・・・

そう考えながら彼が言った歳のことを計算してみた。そうすると、

僕と同じ中3ということになる。

「じゃあ君は中3かい？」

「え？ う、うん？なのかな、今年の4月からは高1だしね」

僕は少し嬉しくなった。同い年の子もこんな文学の本を読むのだと思つて。

「俺と同じだね。俺も4月から高1になるんだ。君、高校は何処に行くんだい？」

一瞬、鬱陶しそうな怪訝な表情を見せたが、笑つて返してくれた。

「都立のセイコー、西南大学付属高校だよ」

「マジ！？ 俺と同じところだよ」

僕は嬉しくなつて笑みを浮かべた。

彼はその反応に驚いたのか、わずかに退いて「ああ・・・」と返してきた。

僕はその反応に気も止めず、握手をするつもりで右手を差し出した。

「俺は辻 睦月。高校に入ったらよろしく」

彼は啞然とした表情を見せた。

僕の行為はおかしかったのだろうか？それとも初対面で馴れ馴れし過ぎただろうか？

しかし、僕の差し出された手を無視するわけにもいかないようで、

どきまぎとした表情で右手を差し出してきた。

「俺は藤堂 賢吾。こちらこそよろしく・・・」

少しひきつったような笑顔をして言った。

僕は彼の名前を反芻し、頭にインプットし、「いい名前だね」と笑つて返した。

この時、僕は直感的にこう思った。

彼は僕と同種の間人だな・・・と、彼からは僕と同じにおいがした。

これが藤堂 賢吾との出会いだった。

それから何日か経つて僕たちは入学式を迎えることになる。

藤堂 賢吾と改めて会つたのもこの時だった。僕は嬉しいことに彼

と同じクラスになった。
今もそれは変わっていない、後悔もしていない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7321e/>

裁 ~ SAI ~

2010年12月12日09時13分発行